

**「新しい東北」官民連携推進協議会
令和5年度 宮城県意見交換会（第3回）議事概要**

令和6年2月5日
「新しい東北」官民連携推進協議会事務局

【日 時】 令和6年2月5日（月）16:00～18:00

【場 所】 宮城復興局仙台支所／オンライン（Teams）

【出席者】（敬称略）

＜副代表団体＞（所属の五十音順）

株式会社七十七銀行／国立大学法人東北大学／仙台港周辺地域賑わい創出コンソーシアム／
宮城県／一般社団法人みやぎ連携復興センター

＜復興庁＞

復興庁 復興知見班／復興庁 宮城復興局

＜事務局＞

株式会社 JTB 総合研究所／株式会社 JTB

【議事概要】

1 開会

復興庁より、今年度に行った取組の振り返り、また次年度の取組に関して忌憚のない意見を願いたい旨、挨拶した。

2 各団体の活動紹介

復興庁、宮城県より、取組紹介資料（資料 2-1～2-6、資料 4-1～4-2）を基に取組を紹介した。

3 実践の場の開催結果を踏まえた意見交換

（1）実践の場の取組結果を踏まえた意見交換

本年度取り組んだエクスカーションプログラムの試行については、昨年度よりも行程のブラッシュアップが図られていたという評価もある一方で、金額設定の面から見た学会や企業研修での活用に向けたハードルの高さに関する意見が寄せられた。金額設定という点では、万博をはじめとしたインバウンド対応の可能性を探っていくことに関する意見があげられた。このほか、1つ1つの観光地やコンテンツに対して横串を刺すような取組やエクスカーションプログラム作成（ストーリー作成）にあたってのノウハウの整理・継承が重要といった意見が寄せられた。

また、宮城県松島高等学校観光科と取り組んだ招待状の取組については、福島県・岩手県の学校との連携も含め、継続していくべきといった意見が寄せられた。

（主な意見）

- ・巨大津波災害に関する合同研究集会は、ハイブリッド開催で教員、学生、研究者等約90名が参加したが、巡検の参加者は26名。学生を含めて津波の研究者なので関心度としては一番高い部類ではないかと思われ、それなりに関心を持っている中で、すでに行ったことがある人もいるものの、三分の一ほどの参加になったということだ。費用的に一人当たり8,000円という価格は正当なのだろうが、参加者側から見ると大分高いのではないかという指摘があった。実際には助成金があり、参加者にとってはリーズナブルな価格で参加してもらえた状況。内実を聞いてみると、やはり食費以外

は研究費で当ててもらえるといった場合に参加しやすいという状況であり、ある程度のお金をいただいてツアーをすること自体、意識の高い層向けであったとしても難しいと感じた。

- ・参加していただいた方々は、概ねご満足いただけた内容だったのかなとは思う。もう少し時間があって、もっといろいろ見て回りたい、もっといろいろな話を聞きたかったという意見は当然あると思うが、そこは時間の制約の中、難しかった部分もある。翌日に催行するとなると、相当程度参加できる人数が減ってしまったのではないかなと思う。
- ・令和4年度に実施したものと比べるとエクスカージョンプログラムはブラッシュアップできていて、魅力あるコンテンツがあるなという実感だった。研修目的でいくと、震災を知らない人向けに、例えば荒浜小学校などのコンテンツを組み込む必要があるのではないかなと思った。
- ・ハーバーハウスかなめやキリンビールの工場見学など、インバウンドのお客様も参加を呼び込めるコンテンツがある一方で、金額設定が非常に高いことをどうしていくかが課題。また、スルーガイドの育成、あるいは多言語化のスルーガイドの育成が課題になってくると思う。
- ・団体旅行の催行数や割合が下がっている中で、エクスカージョンに注目することにはハードルがあるが、そうした中で、今回の企画を催行できたことは1つの実績だとは思う。宮城に来たらやはり被災地を巡る旅、エクスカージョンというのがあるのだという機運を醸成していくことがこれから必要になってくるだろうと思っている。
- ・団体旅行を視野に入れると、うみの杜水族館のバックヤードツアーや毒の展覧会など、何か引っ掛かるものが重要になってくると思う。大阪万博のコース登録については、今回のコースや3.11 伝承ロードが作っているコース、東北観光推進機構が作っているコースなどを、各社の強みを活かして登録してもらえると、バリエーションも強みになってくると思う。インバウンドであれば関西から来るのは日本人よりかはハードルが低いが、他の地域との競争をどうするかということ、なぜ東北を選んでもらうのかということを一生涯懸命頑張っていけないといけないのだと思う。復興の姿や、日本らしさ・東北らしさもコースに組み込み、多言語化を図らないと、なかなか選んでもらえない。官公署の観光部門の取組事例等も参考にしていけばいいのかなと思う。スルーガイドの皆様方に関わっていただきながら東北の良さを感じていただく、次に繋がるリピーター、2回目、3回目の人たちに繋がるような取組になっていくといいのかなと考えている。
- ・自分も関わってみて、今回のようなエクスカージョンプログラムを作っていくことは、ニーズは多くはないけれども、なかなかマッチしないと思った。「新しい東北」の取組の中で、こういったターゲットを定めてアプローチしていくのかの整理が必要。
- ・エクスカージョンプログラムが最少人数に達せず実施できないという話があったが、開催しないとそもそも意見が聞けないので、その点も踏まえて今後検討していく必要があるのかなと思っている。
- ・宮城県と仙台圏で会合があって、その後のエクスカージョンプログラムということだと、半日で仙台圏という形になるかなと思う。荒浜小学校にしても石巻の施設にしても、ピンポイントでは一生懸命やられているが、なかなか施設同士が繋がることがない。旅行会社とタイアップした取組を行っても、コロナの前は募集するとたくさん来たのだが、最近は来ないか、来ても定員の半分ぐらいということが多い。そこをどう魅力を高めるかというのが我々被災地として、また観光などで仕事をする立場としては必要なのだが、難しい。
- ・企業などにしても、震災という名前ではなかなか乗ってこないようになっており、別の形での社会貢献とか、単純に被災地だけでなく、被災地の地域と繋がるような、大義名分ではないが、そういうものがないとなかなか難しいと言われたことがある。施設を見るだけではなくて、地域で震災の後に生業を立ち上げたとか、農業など一次産業で立ち直ったみたいな、企業として社員に対して学べるようなものを組み合わせないと難しいのだと思う。本来は訪問先1件1件に物語というか、発信できることがあると思うので、それを上手く繋げてあげるといいのではないかなと思う。

- ・ 1つ1つの観光地やコンテンツを持たれている方々はいろいろ取り組まれているが、そこに横ぐしを刺すような動きがないのが現状である。そこを上手く繋げていけると、きれいなツアーを組んでいけると思うので、そういった役割を今後果たしていく必要がある。
- ・ エクスカーションプログラムの試行のところで個人的に残念だったのは、途中からプログラムをどうやって良いものを作るかというより、実際にどうこなして、どうやって参加者を集めようかという方向に行ってしまった。「どうやってストーリーを作っていくのか」というのが一番大事で、そこはなかなか民間企業だけでは無理なのではないかと思う。こうしたことを官民連携してやっていくのがこの協議会の場ではないかと思う。誰がストーリーを考えるのか、誰が相手の要望に従ってストーリーをアレンジしていくのか、そして誰がどこ調整するのか。そのノウハウを残していくのがこの官民連携協議会のやるべきことではないかと思う。実際に誰がどうやってそこを悩んできたのか、生み出してきたのか。「もっとこういうところはないか」とか、そういう話をどうやって調整していくのか。それがわかれば、いろいろな企業や団体が真似できるような気がする。
- ・ 大阪・関西万博の復興ポータルサイトでは先月1月11日からすでに商品の申請、募集、受付をしている。大阪・関西圏だけのイベントではなく、世界から日本に来られる際に、万博をご覧になった後に国内、地方都市を回られるケースもあるだろうし、逆のパターンもあろうかと思っているので、地域の魅力をしっかりと商品に代えて伝えていくということになる。条件がいくつかあり、万博の「いのち輝く未来デザイン」というテーマに合った内容になっているか、あるいはお客様に満足度を提供できるような高付加価値の商品になっているか、それからSDGsに関連した工夫が施された商品になっているか、この3つが万博のコンテンツの選定基準と言われている。震災復興というテーマも含まれているので、その点については十分フィットしているのではないかと思う一方で、多言語対応であったり、在庫を入れたときのオペレーション業務といったところには課題感を持っている。
- ・ 松島高校の取組は非常に良い取組であり、松島高校だけではもったいない。関西万博で紹介するのであれば福島、岩手の学校と連携しながらやっていくのもいいかなと思う。復興色がないという部分は工夫だけであり、鳴子温泉の場合には南三陸等の被災者を受け入れているので、女将さんの話を入れていく等の工夫ができればもっと良くなると思う。表紙について、日本人から見ると英語では読めないの、日本人から見たときにも外国人から見たときにもわかるような冊子の作り方は必要だと思う。一方で、万博のときのカードにするなら英語対応なのでこれで十分だし、インバウンドは雪を見に来るので、雪というのは非常にいい。ぜひ継続していただくと有難い。
- ・ 松島高校の取組は興味深く、他の地域の高校でもいろいろな形で大人の方でも仕掛けていければ乗ってくれるのではないかと思うので、続けていった方がいいと思う。
- ・ 復興ツーリズムに関していろいろな団体の動きが出てきており、人を動かす、人に来てもらう、人を泊めるというのは観光業界の一番得意とする分野なので、観光業界の皆さん方にどう関わっていただくかということは非常に重要であろうと考えている。運輸局の観光部と連携すると県内のエージェントや観光関係者が動くし、地元の事業者にも情報が行く。

(2) 次年度の取組に関する意見交換

次年度の取組に関して、万博を1つのマイルストーンとした取組の検討を進めていくことで概ねの合意が得られた。その中では、インバウンドの中でどのような層をターゲットとするか、新しい東北の姿としてどのような姿を見せていくかといった点に関する検討が必要との意見が得られた。また、具体的取組としては、官の力を借りないと実現できない高付加価値で話題性のある特別感のあるコンテンツを考案する、観光に関する関係者を集めて、腰を据えて意見交換を行う場を設ける、といった意見も挙げられた。万博をターゲットに置き、若い世代を巻き込んだ招待状作成の取組と並行しつ

つ、具体の取組案について引き続き検討を進めることとした。

(主な意見)

- ・令和7年の関西万博をずっと目指してやってきたということがあるので、その関西万博で我々が何をしたいのかというところだ。協議会の取組として、15年経って、今まで復興庁や民間の方々を中心に取り組んできた新しい東北の姿を皆さん方に見てもらうのだというところを1つの目標にするのであれば、それに結び付くような来年度の取組があるだろうと思う。「令和7年の大阪万博で、我々は15年経った東北の新しい姿を皆に見てもらうんだ」というところがもしゴールだとすれば、それに見合ったような商品の作り方、観光資源の磨き上げ方、繋げ方というのを来年度やりながら考え、また皆さんの意見を聞かなければいけないだろうとは思っている。令和7年の関西万博のゴールというところをどう位置付けるかというところになってくるだろうと思っている。
- ・エクスカージョンプログラムを実施してコンテンツは良くなってきたが、当初考えていた学会や企業研修に使ってもらうには金額的なハードルが高いということがわかってきており、そこをターゲットにしていくのはなかなか難しい。関西万博があるので、380万人と言われるインバウンドの方々を少しでも東北の沿岸部に来ていただくこと、震災からの復興を1つ鍵として来ていただくということを、来期ブラッシュアップしていくターゲットとするのがいいのではないかなと思う。
- ・万博を見据えていくのであればインバウンドに絞っていくべきだと思う。それが、万博以降にも繋がる取組みに繋がる。
- ・熊野古道の商品化の事例などを踏まえると、長続きするコンテンツ、魅力あるコンテンツを作るには、そんなに短期間でできるものではなく、一生懸命汗を掻いてくれる方がいて、その人の求心力、ないしはそれを作り上げる組織体制でもいいが、そういったものの中で長い期間かけて何かのコンテンツを作っていくことが必要なのではないかなと思う。そのための1つのマイルストーン、道標として関西大阪万博までに何かをやっていくという形はいいのかなと思う。まずはどういう人たちをターゲットにするのかというところを見定める必要がある。震災がコンテンツなのだとすれば、たぶん響くのは津波が来るかもしれない人たちだと思う。そうすると欧州はなり難い。そういった中で、では大阪万博ではどんな人をターゲットにするのかということを議論していけたらいいのではないかなと思った。
- ・高付加価値で話題性のある、限定で何人かで今申し込むと普段泊まれないところに泊まれるなど、旅行代理店が交渉してもできず、官の力を借りないとできない、話題性があるものや、インスタ映えするものを考えていったらいいのではないかなと思っている。
- ・旅行会社・観光協会向けのセミナーなどは頻繁に行われているので、それよりは別の方法がいいのではないかなと思う。連携の創出とか、地元の人たちが結び付くにはどうしたらいいかといったコンセプトの取組がいいのではないかなと思った。
- ・大阪・関西万博に向けて、復興した今の姿や世界中からもらった支援への感謝をどうやって伝えたらいいのか、正面から考え、何も知らない人、東日本大震災を直接知らない世代などにどうやって東北の被災地に興味を持って実際に来てもらうのかというのを、来年1年間かけて取り組んでみてもいいと思う。定例の報告会ではなくて、しっかりと関係者を集めて、実際に商品造成というか、PRをどうやって考えるのか、ストーリーをどうやって考えていくのかという場を作ることを来年上半年期とかかけて議論してみて、下半期に働きかけていくという形も考えられる。
- ・東北の私たちからすれば万博がきっかけで来てもらえるのなら、その後のことも考えたような受け皿をどう作るかというところに少しでも踏み込んで、いろいろな人たちと話し合いができる場を作るといいのかなと思う。コンテンツを磨くとか、受け皿をどのように作っていくかというところをやって、万博の翌年令和8年以降も観光に活かせるような取組に繋がれるとすごく良いと思う。

- ・若い世代、特に高校生が東日本大震災をわからない世代になってきている。彼らが生きてきたのは東日本大震災の後だから、そういった人たちが地元の魅力をどう伝えていくかというところでは、今年の松島高校さんの取組は非常に大きいと思う。それが東日本大震災を経験してきた私たちの「今」なのだろうというところに繋げていくことが必要だろうと思っている。
 - ・復興庁の万博事業も「Build Back Better(より良い復興)」をコンセプトに検討を進めてきている。そのような中で、この協議会と連携できる取組として、招待状を作成するワークショップ設計に取り組んだ。具体的には今年度、宮城県松島高等学校観光科へこのワークショップのメソッドを設計するにあたって、協力依頼をさせていただき、パイロット的にワークショップを実施し、成果物として招待状を作成した。一定程度のワークショップの形も出来上がり、更に磨き上げを行いながら、来年の万博事業の招待状作成の取組にも活かしていく考えである。
- その上で、万博事業では招待状の数も確保する必要があり、その中では個々の招待状の質にも限界があると考えられるので、協議会の取組である程度レベルの高いものを作り、万博の会場で紹介してもらうものに入れ込んでいくということもあるのかと考えている。

4 閉会

次年度の取組について、大きな方向性として、招待状作成の取組については継続、万博をターゲットにおいた取組については、ターゲット層の明確化等を図りつつ、具体の取組案について引き続き検討を進めることとした。引き続き、事務局と副代表団体との間で丁寧に意見交換を進めながら次年度の取組に向けた検討を進めていく。

(終了)